



コラム

Vol.28

日本のIT事情

変貌する秋葉原

遠藤 諭

月刊アスキー 編集長
sato-e@ascii.co.jp

深センの巨大電腦ビルを彷徨する

12月末に香港から深センに入って電腦街を訪ねた。

「東門歩行区」という新宿が渋谷みたいな地区の近くにも『国美電器』(GOME)という、ちょうどヨドバシカメラのような大型量販店があるが、深センの本格的な電腦街は「華強北」と呼ばれる地区にある。タクシーで「電子一條街」と示してもよいし、地下鉄に乗って「華強路駅」で降りるのでもよい。

電気の街、電腦街といえば、「秋葉原」が世界にその名をとどろかせているが、アジアには、そのライバルといえるところが歴史的にいくつもある。香港の深水埗には、1980年代から1990年代にかけて違法コピーソフトで悪名を馳せた「高登電腦中心」がある。ほかにも、いまは九龍側、香港島側に、いくつかの電腦ビルがある。台湾なら台北駅近くの高架下にあった「中華商場」が有名だったが、1990年代に取り壊され、いまは新生北路のこれまた高架下の「光華商場」とその周辺が中心となっている。韓国の場合、東門町からほど近い「チョンゲチョン」が電気街だったが、いまは「ヨンサン」が、秋葉原を凌ぐ店舗数と思われる電気街である。

ところが、中国の電腦街は、これらのアジアの電腦街とはちょっと違っている。

なんといっても、北京の「中関村」の電腦街(ここが元祖「電子一條街」)が、日本のメディアでも何度も取り上げられている。“村”とは名ばかりで大学や企業の研究・開発部門が多く、ここを中心に北京のサイエンスパークを合わせると東京23区の半分くらいの広さとなるようだ。そして、中関村北大路沿いの「海龍電子城」など、巨大電腦雑居ビルがあちこちにある。

深センへは、香港人向けのガイド本を手に出かけたのだが、「華強北商業区」と呼ばれる地区に、なんと、7~8個の電腦ビル(または電気ビル)がある! 到着してみると、ガイドブックに載っていた「賽格電子市場」、「萬商電腦城」、「遠望数碼商場」、「賽博宏大数碼廣場」のほかに、「華強電子広場」というビルが目の前に立っ

ていて、1, 2, 3と連なっているらしい(どんどん増大しているのか)。

私が入った賽格電子市場は、高層ビルの吹き抜けになった9階までにはたくさんの電腦ショップが入っている。このビル1つだけで梅田のヨドバシカメラをふた周りくらい大きくしたような感じである。なんだか、白髪三千丈というか、いかにも中国の昔話に出てきそうな展開だが、本当に巨大なのである。

日本に帰ってから頻繁に中国に仕事で出かける人たちに聞いたら、中国ではあちこちに規模の大小はあれこんな感じの電腦街ができていそうである。その中でも、おそらく深センの華強北が、いま世界最大の電腦街なのではないかと思う。

秋葉原改造計画は石原都知事の発案?

深センに出かけるのと前後して秋葉原の今後について調べていた。

ここ数年、秋葉原が、アニメやフィギュアなど“コンテンツ”の街へと変化してきているのはご存じのとおり。それらの商品の販売やキャンペーンもさることながら、「ギャルゲー」から進化したと思われる「メイド喫茶」や「アキバ系アイドル」、「アニメ専門映画館」などの特徴的な文化が生まれている。しかしながら、秋葉原が“激変”というほど変わってしまうのは、実は、むしろこれからののである。

現在、中央通りとJR山手線にはさまれた秋葉原駅と隣接するところに「秋葉原クロスフィールド」が建設中だ。今年3月に、地上31階建ての「秋葉原ダイビル」が完成。14階までが“ITセンター”となり、その上に日立製作所の本社が入る。1年後の2006年3月竣工予定の地上22階建ての「秋葉原UDX」と合わせて「秋葉原クロスフィールド」を構成することになる。これは、いままでになかった産学連携の施設で、大学がサテライトキャンパスなど8校、産業技術総合研究所などの研究機関、ベンチャー関連の企業が入る。また、イベントやワーク



図-1 建設中の秋葉原UDXより昭和通り側を望む。JR秋葉原駅、秋に開店予定のヨドバシカメラ、遠くに、銀座、芝浦のほうのビルまで見える(2005年1月)。

ショップ用のスペース、飲食店も入る。ちなみに、この末広町寄りには、地上40階建ての都市型高層住宅「TOKYO TIMES TOWER」が完成、すでに入居が始まっている。

今年秋には、つくばと秋葉原を45分で結ぶ「つくばエクスプレス」も開通予定だ。さらに、同じ秋には、地上9階建ての「ヨドバシカメラ」が2万6,400平方メートルという売り場面積でオープンする。どちらも、JR山手・京浜東北線の東側となり、こちら側には、地上31階建ての「富士ソフトABC秋葉原」など、ほかにもいくつかのビル建設が予定されている。

いわゆる「秋葉原」と呼ばれている、西に昌平橋通りから東は昭和通り、北が蔵前通りから南が万世橋付近までの、実に、半分ほどの地図が塗り替えられてしまう！

本当に「秋葉原よどこへ行ってしまうのか？」と問いたくなるほどの変化である。

この秋葉原の開発は、東京都による区画整備事業としてスタートしたものだという。青物市場跡と旧国鉄の有休地を活かさない手はないと、2001年に「秋葉原地区まちづくりガイドライン」なるものが作られ、「秋葉原を世界的IT拠点にしよう」という方向で固まった。秋葉原には、戦前にも「高岡商会」(クラリオンの前身)や「ヤマギワ」,「広瀬無線」があり、戦後は、米軍横流しの真空管(アメ玉)を使った自作ラジオのブームがあり、高度経済成長期の家電ブームやオーディオブームを経て、パソコンの街へと成長してきたという経緯がある。デジタルが、コンテンツと渾然一体となった結果、秋葉原がコンテンツの街となったというのがあるのなら、これ

からのITを担う原動力が秋葉原に期待されるというもありだろう。

とここまででは、あくまで都市計画的な部分だが、実は、秋葉原の周辺は、すでに日本で最もITベンチャーの多い地区なのだという。馬喰町から岩本町、東神田の آپレルや機械関係の問屋のあったところに、ベンチャーが入っている。昭和通りを渡ってしまうと、ビルの賃料もグッと安くなるのだ。私の知っている会社もいくつかあるが、この地区のベンチャーは、いわゆるドットコム企業というよりも技術指向の会社が目立つのが特徴である。

今後、秋葉原は、いよいよ多層的な構造の街となっていこう。 “従来からの秋葉原”(駅付近や中央通り沿いの家電、電子部品、パソコン、コンテンツ/ホビー)、“IT基地としての秋葉原”(秋葉原クロスフィールドなど)、“ヨドバシカメラ秋葉原店”、“ITベンチャーの秋葉原”(昭和通り向こう側)、“IT以外の秋葉原”(これも増加中の飲食/娯楽など)。

しかし、電腦街、IT基地として見た場合には、中国の中関村や深センの華強北のほうで、すでにはるかに規模が大きいのだ。しかも、“水清ければ魚棲まず”の例えではないが、中国ならではの“ナンデモアリ”の活力というものが、いまの日本には求めにくい。秋葉原を“IT関連産業の世界的拠点”にするには、もうふたひねりくらい必要なのではないか。

JR山手・京浜東北線のガード下は、いまのところ開発内容が決まっていないそうだが、やっぱり、日本は土地が狭すぎるのかもしれない。

(平成17年1月17日受付)